

学校推薦型選抜Ⅱ

全学科

小論文

法文学部（法経社会学科 地域社会コース・経済コース）

注意事項

1. 「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
2. この冊子は6ページである。
3. 受験番号は、必ず2枚の解答用紙のそれぞれに記入すること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に横書きで記入すること。

令和4年度

2 ページ以下の課題文を読んで，次の設問に答えなさい。

問1 課題文を要約しなさい。

(400 字以上 600 字以内)

問2 課題文を参考にして，自分の興味のある地域の魅力を高める方法についてあなたの考えを述べなさい。

(400 字以上 600 字以内)

私は経営学者で、都市計画や自治体財政の専門家ではありません。そこで、これからの地方都市のあり方に示唆を与えてくれそうな経営学の知見を紹介しつつ、私なりのアイデアを述べてみたいと思います。

私は経営学者という立場上、企業経営者の方々に講演をする機会もありますが、興味深いのは関西で講演すると決まって、「どの会社も本社機能が東京に行ってしまう。大阪は大丈夫なのでしょうか？」といった質問を受けることです。経営者はもちろん、多くの関西のビジネスパーソンが、とくに大阪という街に強烈な危機感を抱えているのがわかる。申し上げにくいことなのですが、私は「この流れは基本的に止まらないのではないか」と答えることにしています。世界的に見ても、特定分野の知識・産業は特定の都市に集積していく。現在の日本でいうと、多くの知識や産業の集積先として東京が選ばれている。それを前提にして、「では自分たちのところに何を集積させるか」を考えないといけない。

しかし、ほんの10年前はまるで逆の主張が流行していたことを覚えていらっしゃる方も少なくないでしょう。その典型例が、トーマス・フリードマンというジャーナリストが書いた『フラット化する世界』（日本経済新聞出版社、2005年。原著は2005年刊行）です。インターネットの普及や、後進国と見なされていた国々の急速な経済発展により、世界中にモノ、ヒト、カネ、情報がまんべんなく行き渡るようになり、世界は均等化していくというのがこの本の主張で、大変なベストセラーになりました。

フラット化とはまったく逆の主張をしているのが、都市経済学者のリチャード・フロリダです。彼は脱工業化したアメリカの都市においては労働者の3割にあたる「クリエイティブ・クラス」がイノベーションを生み出し、クリエイティブ・クラスが集積する都市とそうでない都市で明暗が分かると主張しています。私の実感でもアメリカでは知の都市集積が進んでいる印象がありますし、日本では東京に本社機能が集中していくのも現象としては同じことでしょう。世界はフラット化とは逆の方向に向かっている可能性が高いのです。

いまやネットやメールを使えば相当な量の情報を交換することができますし、ストリーミング技術を使ったテレビ会議も当然のことになっています。それにもかかわらず、なぜ人々や企業はわざわざ狭いエリアに集まるのか。これは経営学の知見をもとにした私の仮説ですが、フェイス・トゥ・フェイス（相手と向かい合った）でのイン

フォーマル（くだけた）なコミュニケーションや、偶然の出会いといったものが、知識社会においては今まで以上に重要になってきている可能性が高いのだと思います。経営学では、イノベーションとは、いわば新しい知と知の掛け合わせ、つながっていなかった知の重なりと考えられています。性別や年齢、子どもの有無など多様な人材を雇用するダイバーシティ経営が注目されているのも、バラバラの知が集まることのメリットが重視されているからです。

しかし、このような掛け合わせを意図的に起こすことは簡単ではありません。お膳立てしてもイノベーションは起こるものではない。そうではなく、もともと多様な人がいる場所に自らも身を置いて、たまたまパーティで会ったとか、カフェで起業家同士が意気投合してビジネスが生まれたとか、そういった成功例がほとんどなのです。人と人の直接のインタラクション（相互作用）で生まれる、ネットには載らないようなインフォーマルな情報がさらに価値を持つようになるので、人々がますます都市に集まるという流れは不可逆のものだと考えています。

これはたとえば、経営学の「リソース・ベースト・ビュー」という理論で説明できます。これは「企業や人が競争優位に立つには、価値があり、希少で、模倣が不可能な資源を持っていないといけない」という考え方です。これからのビジネスでもっとも重要な資源は、いうまでもなく知識と情報です。『失敗の本質』でも広く知られる一橋大学名誉教授の野中郁次郎先生は、知識には言語化可能な「形式知」と、言語化できない「暗黙知」があり、この二つの知を相互活用させることがこれからの経営資源になるとおっしゃっています。すなわち、そのような顔を合わせることでしかつかめない「雰囲気」などに含まれる情報・暗黙知が重視されるのです。裏返せば、言語化して文書化された情報は模倣可能であり、現代ならば容易にコピーし配布できる。リソース・ベースト・ビューに沿っていえば、それは誰でも手に入るので価値がなくなっていく、希少ではなくなっていくともいえるのです。

「フラット化によりシリコンバレーは消滅する」といった予言もずっといわれ続けていますが、いまだにシリコンバレーは人を集め続けています。ソフトバンクの孫正義さんや楽天の三木谷浩史さんといった経営者が、一年の多くの時間をシリコンバレーで暮らすようになったのも、その場所が持つ機能、情報と人材の集積の利益という理由があるからです。

私の高校時代の同級生に、「WiL」というベンチャーキャピタルを立ち上げた伊佐山元という人がいます。彼も1年の3分の2くらいはシリコンバレーに住んで、東京と往復しています。彼と以前対談した際に、「仕事に行き詰まったときにはどうするの？」と聞いたら「とりあえずスタバに行く」と言うんですね。シリコンバレーのど真ん中にスターバックスがあって、そこに行くのと大物の起業家やベンチャーキャピタリストなどがぞろぞろいるから、誰かに相談すると悩んでいたことが5分で解決するんだ、と。アメリカではシリコンバレーに、東京ならたとえば渋谷や目黒川沿いに起業家が集まるのは、彼らはそのような暗黙知の存在を無意識に理解していて、いわばリアル空間でのソーシャルネットワーキングをやっているのでしょう。不確実性が高まる世界で知識の重要性が増すときに、ますますインフォーマルなやり取りや偶然の出会いが必要とされて集積が起こっている。都市に人が移動し、さらに東京へと一極集中していく流れそのものは、このような観点からも止まらないだろうと考えています。

日本国内においてこのような東京への集積の流れが止められないのであれば、他の都市や地方部は、東京と競争する必要もないともいえます。東京都とは異なるタイプの集積を目指していけばいい。中核都市の規模があれば、シリコンバレーと同じとはいわないまでも、同じような発想による施策次第で、人が人を呼び偶然の出会いから活性化していく可能性は十分あると思っています。

実際にそうなりつつあるのが福岡市ではないでしょうか。国家戦略特区に選ばれたこともあります。創業5年以内の企業の法人実効税率を17%以下に引き下げて起業を促すなど、「アジアのシリコンバレー」を目指した施策が奏功しつつあります。東京23区、札幌市とともに人口流入超のトップ3に位置し、とくに若い世代の転入者が多くなっています。高島宗一郎市長は趣味がクラブDJだったそうですが、今、挙げたようなマクロの政策だけでなく、ソフト面でも多様な人々の交流を重視しているのが大きな特徴です。他にも、たとえば京都には潜在的にその可能性があるでしょうし、新潟市などもアジアやロシアとのハブになる可能性があるかもしれません。

[中略]

東京のような大都市だけでなく、地方都市でも人を惹きつけるまちづくりは可能な

はずです。シリコンバレーだって、行ってみればすぐにわかりますが本当に田舎で、道端には車に轢かれたスカンクの死骸が転がっている、そんな場所です。でも先の伊佐山元君は、「俺は東京では仕事ができない」と言うんですね。東京は過密すぎて、常に人と会わざるを得ない環境なので疲れる、ぼうっとする時間につくれない、と。彼はゴルフ好きで、コースを歩いているときに仕事のアイデアが浮かぶことが多いそうなんです。僕もバッファローにいたときは、運転中に突然研究のアイデアがよぎって、すぐ路肩に車を停めてメモをする、なんてことがよくありました。都会では危ないですけど、田舎町なのでまったく大丈夫なんですね。

こういうひらめきや思いつきをもたらす仕組みは、脳科学の分野では「デフォルト・モード・ネットワーク」と呼ばれていて、ぼんやりしたり、あまり集中していない状態のときに、脳の複数の領域が神経活動を同調させながら活動していることがわかってきています。アルキメデスが入浴中に浮力の原理を発見したのは有名な話ですし、アインシュタインの相対性理論の原型となるアイデアは、学校の昼休みに丘の上で寝転んでいたときに見た夢のイメージだったといわれています。

日本でも、若い起業家が中核都市から少し離れた片田舎に集まる傾向があります。「面白法人カヤック」などがある鎌倉市は「カマコンバレー」と呼ばれていますし、軽井沢町にも知り合いの起業家や研究者が移住したりしています。考えること、アイデアを出すことが重要な仕事に就いている人たちは、ぼうっとすることの必要を潜在的に知っているのではないかと思います。人と会い、思考に集中し、そしてしっかりとリラックスする、このバランスを提供できる環境は、中核都市から衛星のようにネットワークされた小都市にこそあるのではないのでしょうか。リタイアした年配層だけでなく若者にも田舎暮らし志向があるのは、東京などの大都市では脳がアイデアを生みやすいようにリラックスできる機会が乏しいからかもしれません。私自身も、数年前までは大都市のコンクリート・ジャングルの中で一生生きようと思っていたのですが、最近は田舎に行くのが嬉しくて仕方がない、そんな変化に我ながら驚いています。

ただポイントは、一方で先から述べているように、人は知と知の偶然の組み合わせ、すなわち知の集積した都市も求めているということです。その意味でも、これからは知の集積が進む大都市と、その周辺でぼんやりとデフォルト・モード・ネットワークの状態がつけられる地方部を行き来する人が、増えるのではないのでしょうか。実際、鎌

倉も軽井沢も東京に十分通える距離です。

そういう意味では、地方都市が人を惹きつけるためには、まずは住みやすさがもっとも重要でしょう。あとは人を集めるちょっとおしゃれなカフェがあって、そこでは無線 LAN も電源も使えて、夜は小さなパーティが開けるバーになる。バーベキューができる河原や公園がある……そんな小さなことで十分なのだと思います。大きなハコモノをつくるとか、無理やり特区にするべく条例を改正するといったことは、いきなりハードルを上げすぎでしょう。人を呼ぶのは、魅力的な人です。その魅力のある人をどうやって惹きつけるか、そこに知恵を注ぎ込むべきなのだと思います。

〔出典〕 入山章栄「第3章 フラット化しない地域経済」飯田泰之ほか『地域再生の失敗学』光文社、2016年による。ただし、問題作成のため、原文の一部を改変している。